

『太平経経鈔』戊部卷之五(涵七四六、葉八裏第七行～葉九裏第十行)

【原文】

古者聖人在位、常力求隱士賢柔、可以共理。
願聞四時為尊貴。

然。王氣乃為無氣之長也、眾氣所繫屬、諸尊貴之君也。王氣乃為天為皇、為帝為王、為太歲、為月建、為斗岡、為青龍、為大德、為盛興、為帝王、為無上王、為生成主。是故王氣所處、萬物莫不歸王之、王氣所居、皆王而生、所背去悉死、由元氣也。故王氣處陽則陽王、居陰則陰王、居天則天王、居地則地王、所處者皆王、受命主理。

是古者聖人王者、春東、夏南、秋西、冬北、六月中央、叵氣則謁見天、王氣乃尊於天。當月建名為破大耗、當帝王氣衝、為名死滅亡。元氣建位、帝王氣為第一氣、尊嚴不可妄當也。

【訓】

古者聖人位に在り、常に力めて隱士賢柔を求め、以て共に理むべし。願はくは四時の尊貴をるを聞かん。

然り。王氣乃ち無氣の長為るなり、眾氣の繫屬する所にして、諸尊貴の君なり。王氣乃ち天為り皇為り、帝為り王為り、太歳為り、月建為り、斗岡為り、青龍為り、大德為り、盛興為り、帝王為り、無上王為り、生成主為り。是の故に王氣の處る所、萬物之を王とするに歸せざるは莫く、王氣の居る所、皆王みかにして生ず、背去する所は悉く死す、元氣に由るなり。故に王氣陽に處れば則ち陽王へ、陰に居れば則ち陰王へ、天に居れば則ち天王へ、地に居れば則ち地王へ、處る所の者は皆王んにして、命を受け理を主る。

是れ古者聖人の王たる者、春は東、夏は南、秋は西、冬は北、六月は中央にありて、氣を叵らせれば則ち天に謁見す、王氣乃ち天に尊し。月建に當たれば名づけて破、大耗と為し、帝王の氣に當たりて衝すれば、(名づけて)死、滅亡と為す(為して名づく)。元氣位を建て、帝王の氣第一氣と為り、尊嚴として妄りに當るべからざるなり。

【訳】

昔、聖人は(しかるべき)位にあり、常に隱士や賢人を求めることに努め、彼らと一緒に統治することができたのですね。(それでは)四時における尊貴なるものについてお聞かせ願えるでしょうか。

よろしい。王気は気無き者の統括者であり、諸々の気の係累であり、諸々の尊貴なるものの中の君主である。王気は天であり、皇であり、帝であり、王であり、太歳であり、月建（北斗の斗柄の指す方向）であり、斗綱（北斗の柄）であり、青竜であり、大いなる徳ある人物であり、繁榮している人物であり、帝王であり、最上の王であり、万物を生成する主である。そのため王気がある所は、（王気を受けて）王となるものに帰属しないものはなく、王気がある所は、皆旺盛となり物事を生み出し、それに背くものは全て死ぬのである。元気に従うからである。だから王気が陽にあれば陽が盛んとなり、陰にあれば陰が盛んとなり、天にあれば天が盛んとなり、地にあれば地が盛んとなり、（王気がある）ところは全て旺盛となり、天命を受けて統治を掌る。

昔、聖人で（王気を受けて）王となる者は、春は東、夏は南、秋は西、冬は北、六月は中央におり、気を巡らせ天に拝謁した。王気は天の中で最尊なのである。月建（斗柄の指す方向）に抵触すると、それを破や大耗と名付け、（帝王は王気と通じているので）帝王の気に抵触してぶつかると、死や滅亡と名付ける。元気がふさわしい位に位置すると、帝王の気は第一の気となる。厳かにして妄りにこれと抵触してはならない。

【注】

○古者聖人在位、常力求隱士賢柔、可以共理。

以上は『敦煌目録』(S.4226) 卷七十七「使四時神吏注法」に当たり、以下は卷七十九「神吏尊卑決」に相当するとする（楊寄林）。

○隱士賢柔

『太平經鈔』丙部卷三「上善弟子受師道德之後、念緣師恩、遂得成人、乃得長與賢柔相隨、不失行伍。」『太平經鈔』己部卷六「賢柔欲樂輔帝王治、象吾文為之、可以致太平乎。」『十誦律』卷第三十六、後秦北印度三藏弗若多羅譯「大王善好賢柔、百千萬人持諸餽饈往問訊王、王噉以自活。」

○王氣

『太平經鈔』丙部卷二「春王當溫、夏王當暑、秋王當涼、冬王當寒、是王德也。夫王氣與帝王氣相通、相氣與宰相相應、微氣與小吏相應、休氣與後宮相同、廢氣與民相應、刑死囚氣與獄罪人相應、以類遙相感動其道也。王氣不來、王恩不得施也。古者聖王以是思道、故得失之象、詳察其意。王者行道、天地喜悅、失道、天地為災異。夫王者靜思道德、行道安身、求長生自養。和合夫婦之道、陰陽俱得其所、天地為安。天與帝王相去萬萬餘里、反與道相應、豈不神哉。」

○無氣

『太平經合校』四行本末訣第五十八「凡事人神者、皆受之於天氣、天氣者受之於元氣。神者乘氣而行、故人有氣則有神、有神則有氣、神去則氣絕、氣亡則神去。故無神亦死、無氣亦死、委氣神人寧入人腹中不邪。」

○天、皇、帝、王

『太平經鈔』丁部卷四「天有三皇、地有三皇、人有三皇。天有五帝、地有五帝、人有五帝。天有三王、地有三王、人有三王。天有五霸、地有五霸、人有五霸。何謂也。天有三皇若三光、地有三皇若高下平、人有三皇若君臣民。天有五帝若五星、地有五帝若五嶽、人有五帝若五藏。天有三王謂三光、五霸為五嶽、與人地皆同。天之三皇、其優者日、中者月、下者星。地之三皇、優者五嶽、中者平土、下者田野。人之三皇、優者君、中者臣、下者民。」

○太歲

『太平經鈔』庚部卷七「然未欲大得天地之心意、有益於帝王政理者、乃當順用天地之心意、不可逆太歲諸神、同舍其氣、與帝王用事。」

『論衡』難歲「『移徙法』曰、「徙抵太歲、凶。負太歲、亦凶。」抵太歲名曰歲下、負太歲名曰歲破、故皆凶也。假令太歲在甲子、天下之人皆不得南北徙、起宅嫁娶亦皆避之。其移東西、若徙四維、相之如者、皆吉。何者。不與太歲相觸、亦不抵太歲之衝也。」「且太歲、天別神也、與青龍無異。」

○月建

『淮南子』天文訓「大時者、咸池也。小時者、月建也。」

明·郎瑛『七修類稿』卷三天地類·月建「正月節。戌時。北斗之杓指於寅位之初。雨水。正月中氣。斗杓戌時招寅位之中。二月指卯。三月指辰。名日月建。亦名斗建。若遇閏月。其月內無中氣。戌時斗杓指於兩辰之間。」

○斗綱 斗綱とも。

『太平經鈔』庚部卷七「天君親隨月建昇斗綱傳治、不失常意、皆修正不敢犯之。故言天遣。」
『後漢書』律曆志下「昔者聖人之作曆也、觀璇璣之運、三光之行、道之發斂、景之長短、斗綱（之）〔所〕建、青龍所躔、參伍以變、錯綜其數、而制術焉。」

○青龍

『論衡』難歲「且太歲、天別神也、與青龍無異。」
『淮南子』天文訓「天神之貴者、莫貴於青龍、或曰天一、或曰太陰。太陰所居、不可背而可向」

『漢書』律曆志下「日周于天、一寒一暑、四時備成、萬物畢改、攝提遷次、青龍移辰、謂之歲。」

○大德

『太平經鈔』辛部卷八「德與德為親屬兄弟者、今日身執大德、以德為意。凡有德之人推謙相事、天下德人畢出矣。」

○盛興

『太平經合校』邪正法第七十八「令天下俱得誦讀正文、如此天氣得矣、太平到矣、上平氣來矣、頌聲作矣、萬物長安矣、百姓無言矣、邪文悉自去矣、天病除矣、地病亡矣、帝王遊矣、陰陽悅矣、邪氣藏矣、盜賊斷絕矣、中國盛興矣、稱上三皇矣、夷狄卻矣、萬物茂盛矣、天下幸甚矣、皆稱萬歲矣。子無閉塞吾文。」火氣正神道訣第一百三十五「陰者稱邪、故奸氣常以陰中往來、不敢正晝行。奸而正晝行、為名陰乘陽路。病而晝作、名為陰盛興、為陽失其道、君衰間為是久矣。」

○無上王

東晉·佛跋陀羅『大方廣佛華嚴經』卷第四·如來名號品第三「諸佛子。次此西方有四天下、名曰佛慧、彼稱如來、或謂性慧、或謂愛現、或謂無上王、或謂無恐怖、或謂實慧、或謂常化、或謂知足、或謂法慧、或謂究竟、或謂能忍、如是等稱佛名號、其數一萬。」北涼·曇無讖『大方等無想經』大雲初分金剛智健度第十六「如來無上王。無生亦無滅、為諸眾生故、示現於生滅。」

○生成主

『太平經鈔』丙部卷三「然父教有度數時節、故因四時而教生成。」

○春東、夏南、秋西、冬北、六月中央

『呂氏春秋』任地「五時見生而樹生、見死而穫死。」高誘注「五時、五行生殺之時也。」陳奇猷校釈「五時者、春、夏、秋、冬、季夏也。本书『十二紀』、春屬木、夏屬火、秋屬金、冬屬水、而于『季夏』之末別出中央土一節、是以木、火、金、水、土五行配屬春、夏、秋、冬四季、即所謂五時也。」

○謁見

『太平經鈔』壬部卷九「觀天所施為、知其動搖、各從其宜。朝天謁見、自有常日。」

○破大耗

『太平經鈔』壬部卷九「夫建氣王氣、是乃天四時五行之帝氣也。相氣除氣、為前一、是正其前毛頭、直指之吏也。所向者伏姦、不得復行為害、除前滿平定氣、皆善良吏也。前五執者居前、預為帝王氣、執除大邪、建前五將、悉受天正氣、皆天之神吏、當為天使、無大小

萬二千物之屬、皆當被服其德、而奉行其化。當王氣為死、當月建為破、此尊嚴第一之氣、故不可當也。當者死、名為殺氣大耗、月建後為閉、閉塞邪姦、恐後休伏之氣、來于帝王建氣也。故天閉其後、後而開、卻休邪氣、教去也。其後為成姦、便當收之也。後五為危、危者、其處近天執大殺、一轉破即擊、故為危也。此後五將、天將欲休之、與地同氣、主閉藏、姦邪鬼物同處、不可使也。」

また、清・『六壬大全』卷一・太歲神煞に「歲破大耗」などの語あり。

【原文】

月建後一為閉、閉者乃天主閉塞其後、陰休氣恐來前為姦猾、干帝王建氣也、故閉其後也。開者天之法、不樂害傷也。故開其後者、示教休氣、為其有為姦者、樂開使退去也。不去當見收、收則考問之、則成罪、罪則不可除、令死危。故後五為危、危則近死矣。故後六為破、天斗所破乃死、故魁主死亡、乃至危也。故帝王氣起少陽、太陽、常守斗建。死亡氣乃起於少陰、太陰、常守斗魁。是故後六將、天常休之空之、與地同氣、主閉、藏匿奸宄、與邪鬼物同處、不可妄開發。

【訓】

月建の後一を閉と為す、閉は乃ち天其の後を閉塞するを主り、陰なる休氣恐らくは前に來たりて姦猾を為し、帝王の建氣を干すなり、故に其の後を閉ざすなり。開は天の法、害傷を樂はざるなり。故に其の後を開く者、休氣に示教し、其れ姦為る者有る為、開きて退去せしむるを樂ふなり。去らざれば當に收せられ、收せらるれば則ち之を考問す、則ち罪を成し、罪なれば則ち除くべからず、死危せしむ。故に後五は危と為し、危なれば則ち死に近し。故に後六は破と為し、天斗の破る所は乃ち死す、故に魁は死亡を主り、乃ち危に至るなり。故に帝王の氣は少陽、太陽「より」起こり、常に斗建を守る。死亡の氣は乃ち少陰、太陰より起こり、常に斗魁を守る。是の故に後六將、天常に之を休ませ之を空にし、地と氣を同じうせしめ、閉を主らせ、奸宄を藏匿させ、邪鬼の物と處を同じうせしめ、妄りに開發するべからず。

【訳】

月建（斗柄の指す寅）の後ろから一つ目を「閉」とする。「閉」とは天がその後を閉ざすことを掌る。陰なる休氣は恐らく前にやってきてよこしまなことを行い、帝王の「建」の氣を侵犯するであろう。だからその後を閉ざすのである。「開」とは、天の法は物を傷つけることを願わないということである。だからその後を「開」くとするのは、休氣に教え諭して、そのよこしまなことを行う者がいるため、（逃れるべき道を）開いてそれを退去させることを願うのである。もし退去しないならば「収」監され、収監されれば尋問することとなる。そして罪と「成」り、罪になれば、それを免除することはならず、死なんばかりの危険な状

態に至らせることとなる。だから月建（斗柄の指す寅）の後ろから五つ目を「危」とする。危険であれば死に近い。だから月建の後ろから六つ目は「破」とし、天の北斗により打ち破られるものは死ぬのであり、だから斗魁（北斗七星の柄杓の四つの星）は死亡を掌り、この上なく危険なのである。だから帝王の気は（東の）少陽・（南の）太陽より起こり、常に斗建を守る。死亡の気は（西の）少陰・（北の）太陰より起こり、常に斗魁を守る。それゆえに後ろの六将（閉・開・収・成・危・破）については、天は常にこれらを休ませ空虚にさせ、地と気と同じくさせ、「閉」を掌らせ、悪行を表に出させず、邪悪な妖鬼と同じ場所にいさせる。妄りに世に放ってはならない。

【注】

○建氣、後一、後五、後六

『淮南子』天文訓「寅為建、卯為除、辰為滿、巳為平、主生。午為定、未為執、主陷。申為破、主衡。酉為危、主杓。戌為成、主少德。亥為收、主大德。子為開、主太歲。丑為閉、主太陰。」

建除法

主生	建	寅
	除	卯
	滿	辰
	平	巳
主陷	定	午
	執	未
主衡	破	申
主杓	危	酉
主少德	成	戌
主大德	收	亥
主太歲	開	子
主太陰	閉	丑

○考問

『東觀漢記』和熹鄧皇后伝「宮中亡大珠一篋、主名不立、念欲考問、必有不辜。」

○斗建

『漢書』律曆志上「日至其初為節。至其中斗建下為十二辰。視其建而知其次。」

○少陽・太陽・少陰・太陰

『太平經鈔』癸部卷十「立冬之後到立春、盛行用太陰氣、微行少陽之氣也。……立春盛德在仁、氣治少陽、王氣轉在東方、興木行、其氣弱而仁、……春分已前、盛行少陽之氣、微行太陽之氣、……立夏日盛德火、王氣轉在南方、……夏至之日、盛德太陽之氣、中和之氣也、其神吏思之可愈百病。季夏六月、盛德合治。王氣轉在西南、迴入中宮……立秋日盛德

在金、王氣轉在西方、……秋分日少陰之氣、微行太陰之氣也、……立冬之日、盛德在水、王氣轉在北方。」

○奸宄

『書』舜典「帝曰、皋陶、蠻夷猾夏、寇賊姦宄。」孔伝「猾、亂也。夏、華夏。羣行攻劫曰寇。殺人曰賊。在外曰姦、在內曰宄。言無教所致。」

○邪鬼物

『太平經鈔』己部卷六「無功之人、天地所忽、神靈所不愛也。下愚不能深自知惡、反妄思得天官而不止、邪鬼物因而共入其心、使妄語、因而妖言、而不能自禁止也。」

○開發

『漢書』王莽伝中「吏民上封事書、宦官左右開發、尚書不得知。」
桓譚・嚴可均輯『新論』識通第十「漢武帝材質高妙、有崇先廣統之規。故即位而開發大志。」